〔書評・文献紹介〕

Frank Griffel

The Formation of Post-Classical Philosophy in Islam

New York: Oxford University Press, 2021, pp. ix+651, ISBN9780190886325

宮　島　　舜

著者フランク・グリッフェル教授は，アブー・ハーミド・ガザーリー（1111 年没）の神学研究に軸足を置きつつ，中世イスラーム世界の思想，なかんずく「ポスト古典期」の哲学・思想を攻究している。*Al-Ghazali's Philosophical Theology*（2009 年）にみられるように，著者はガザーリーの神学が有する哲学的な性格を分析し，さらにその成果をつうじてガザーリー対哲学者，延いては神学（宗教）対哲学という枠組みに基づく従来のイスラーム哲学史観に揺さぶりをかけ，イスラーム哲学史における「哲学」のあり方をめぐってわれわれに再考を促してきたが，本書はその著者が前著以降の十年以上の研究成果を携え満を持してポスト古典期における「哲学」の領分を問う力作である。イスラーム哲学史における宗教と哲学の対立という，著者をして言わしむれば偽りの枠組みに異を樹てるとともに，その対立の最も重要な局面と目される 6/12 世紀の思想の現場を踏査し，その実際を検分してみせようとする，思想史的な壮図である。著者は本書でまず泰西のイスラーム哲学研究がこんにちまで抱えつづけている，それ自体は研究者のあいだでよく知られた痼疾について，あらためて叮嚀に叙示することから本書をはじめる。次のような哲学史観がそれである。イスラーム世界の哲学は中世のある一時期に高度に錬磨されたが，ある時点までに絶頂を迎え，その知的財産を中世ラテン世界に手渡すと，既にして退潮していった。イスラームにおける哲学の営みはギリシア哲学の知見を継承ないし保存しそれを西欧へと渡す哲学史上の重要な中継点であった云々。このような哲学史観が 19 世紀から 20 世紀にかけての欧州のイスラーム哲学研究のなかでつくりだされていった。西洋世界ではじめてものされたエルネスト・ルナンによるイスラーム哲学のモノグラフはその好個の例である。

さて，イスラーム哲学のひとつの盛りあがりをイブン・シーナー（1037 年没）とかれの体系的哲学の登場に見てとることに特段の故障はなかろう。ギリシアか

ら継受された思考がイスラーム世界においてより複雑化高度化し，イブン・シーナーにおいてその体系化を見た。この哲学の体系化はアリストテレス以来の一大壮挙であったといっても溢美とはなるまいが，この体系はしかしまもなく批判にさらされる。一方ではイブン・ルシュドの批判にあい，さらに純粋アリストテレス主義的な体系として錬磨され――その過程で論争を呼ぶ知性論を生みもしながら――西欧ラテン世界に受容されることとなったが，こちらは本書では考察の対象とされない（したがってポスト古典期とはたんに年代に基づく劃定ではない）。著者の立場によれば，イブン・ルシュドやイブン・トゥファイルらアンダルスにおける哲学はポスト古典期の哲学といわんよりはむしろ古典哲学の徹底であり，後述するファルサファからヒクマへの遷移には関わりあいが稀薄であるうえ，かれらの著作じたい本書でポスト古典期とされる時代・地域の哲学者たちには本格的に読まれ論ぜられることがなかった。本書で問題とされるのはそれ以降「哲学」は終焉を迎えたと言われる時処，重に 6/12 世紀（以降）の東方イスラーム世界で展開した思索であるが，ここにおいて緊要であるのは，しばしばそれによってイスラーム世界における哲学の命脈が絶たれたとされてきた，ガザーリー（『タハーフト・アル・ファラーシファ』）による「哲学」批判である。いったい著者はすでに初期イスラムの棄教をめぐる議論を扱った *Apostasie und Toleranz im Islam*（2000 年）で，イスラムにおける哲学退潮の原因をガザーリーに帰すのは誤りであることを証示し，前出 *Al-Ghazali's Philosophical Theology* においては，ガザーリーの思想が哲学を滅ぼす底のものであるどころかすぐれて哲学的な思索であることを明示したのであった。本書ではさらに論歩を進め，いったいガザーリー以降も哲学は消えていないことを実際にかれ以後の思想家たちの思索を提示することで示す。

ガザーリー以降も哲学はつづいていたという主張はこんにちでは新味のないものになっていると見えるかもしれないが，そうではないと著者は言う。実際にはポスト古典期の思想の内実にかんする調査研究はいまだ不十分であるうえ，こんにちでもなおガザーリーが哲学を排撃したという式の説明が流布している。しかしガザーリーは，前記のルナンがかつてそう評したように，哲学をその外から攻撃したわけではない。合理的な哲学的思考を，（イスラームの正統教義の名の下に）非合理的な哲学ならざる思考でもって擯斥しようとしたのではさらにない。ガザーリーがアヴィセンナらを批判するのはあくまで哲学の理論上でのことなのである。じっさい十二世紀において，アヴィセンナ的な立場とガザーリー的な立場とが哲学的な論争を繰り広げているのである。ガザーリーもその支持者たちも哲学に従事していたのである。ただしこのばあい哲学の内実に我々は注意せねばならず，そのことが所述の哲学滅亡説が導来する一因ともなっている。後述するように「哲学」を表わしうるアラビア語は複数あり，イスラーム哲学史上にお

いては哲学を指意するのに「ファルサファ（falsafah)」(φιλοσοφία の音写）と「ヒクマ（ḥikmah)」(「叡智」を意味する語）という両様の言い方があった。ガザーリーが「哲学者」たちを批判し，かれらの説く三つの学説（世界の永遠性の肯定，神の個物知の否定，肉体復活の否定）については不信仰であると断罪さえしたとき，かれが批判した対象はあくまで「ファルサファ」，すなわちギリシア哲学（アリストテレス哲学）に立脚して思索する――ガザーリーからみれば，アリストテレスを絶対視しその説を盲信する――イブン・シーナーをはじめとする一つの思想集団（逍遙学派）の思想にすぎないのであって哲学そのものを貶斥したのではない。

本書は大きく三つの部に分たれている。第一部では，本書における著者の基想たりうるポスト古典期哲学の概念規定が行なわれる。第一部第一章ではモンゴルの侵寇を契機として哲学が衰微衰滅したとする通説が歴史的に検証される。そして哲学等の知的活動の継続／断絶にたいするモンゴルによる征服の影響はこれまでの（ポスト古典期の哲学衰亡説を採る）史家が説いてきたよりは限定的であることが示される。さらにモンゴル軍の西漸に伴い，ポスト古典期の中心地であった東方イスラーム世界（ホラーサーン，トランスオクシアナ，ホラズム）における知的活動が西方へと移動したとされる。本章は古典期以後の思想哲学活動にとっての時代背景・知的風土を知るうえで好個の概説である。第一部第二章ではファルサファからヒクマへの遷移が語られる。ギリシア由来の哲学がイスラーム世界の哲学者たちのあいだに摂取，我有化，同化されてゆく過程のなかでファルサファとしての哲学からヒクマとしての哲学へと移行していったと主張される。ファルサファとヒクマそれぞれの明確な意味内容について当時の哲学者たちのあいだでどれほど共通了解があったかについては疑問の余地が残るものの，すでにアブドルハミード・Ｉ・サブラのいわゆる appropriation と naturalization との定式化に示されているとおりギリシア哲学を学び受容する段階を経たのちのイスラーム哲学はその学知を自家薬籠中の物としみずからの独自の思索を展開していった点は少なからぬ専門家の認めるところであろう（Sabra 1987)。ガザーリー『タハーフト』による批判がひとつのメルクマールを形成し，これ以降はファラーシファはたんに哲学者という中立的な意味を表わすことをやめてある特定の思想体系を奉じる集団という意味あいを帯びるようになり，恰も一箇の分派・宗派のようにして用いられた（シャフラスターニーやファフルッディーンの用法はその例証となる)。これと揆を同じくしていかにも外国語の響きを残すファルサファはペジョラティフな含みを帯びはじめる。どちらも存在や認識などを分析する高度に抽象的な論理的思考を本領とする学ではあるものの，ファルサファは外来異教の学，ヒクマはイスラームに適った学という位置づけがなされるようになった。それにしたがいムスリムの哲学者たちはみずからの営為をファルサファでなくヒ

クマと称するようになってゆき，ヒクマは「叡智」という一般語からはなれて哲学を指す術語（訳語）となった。ただし，ヒクマはあくまで哲学でありカラームの学（イスラーム思弁神学）とは区別された。したがって「哲学」的な思索を展開した者でも自身の思想をヒクマではなくカラームと規定し，ムタカッリム（カラーム学者）をみずからもって任ずる者もあった。同じ部の第三章では宗教・哲学間の軋轢とされるものの内実を，12 世紀哲学においては無視しえぬガザーリーによる哲学者断罪の実際的な効験を探測することで明らかにされる。著者によれば，ガザーリーの「ファトワー」が大規模な哲学者迫害を将来したとはいえない（また（キリスト教圏に比して）ことにイスラーム圏が思想的に不寛容であったということはない）。ともに 12 世紀に処刑されたふたりの有名な哲学者，アイヌルクダート・ハマダーニー（1131 年没）とシハーブッディーン・ヤフヤー・スフラワルディー（1191/2 年没）についても，その処刑の誘因はたんに宗教的権威による哲学にたいする迫害のみならないのであり，社会政治的な文脈にも帰因されうると著者は論定する。尤も，ガザーリーの「ファトワー」の効験をこのように小さく見積もることはかれの哲学批判の影響を矮小化することにもなりかねまじいけれどもそれについては著者とても好ましく思わないだろう。

第二部ではより思想家の思想の内実へ踏みこむ。6/12 世紀の哲学者たちの生の閲歴を調査し，その知的活動の実際を明示する。まずイブン・シーナー哲学の当時の受容状況が確認され，つづいて個々の思想家の生涯と思想がとりあげられる。アブルバラカート・バグダーディー（1165 年没），ガザーリー主義のムタカッリム（シャラフッディーン・マスウーディーとイブン・ガイラーン・バルヒー（ともに 1194 年頃没）），マジュドッディーン・ジーリー（1175 年以後没），スフラワルディー，ファフルッディーン・ラージー（1210 年没）が，親イブン・シーナー／親ガザーリーの枠組みを背景として，俎上に載せられる。著者はかかる例示をつうじてポスト古典期においても哲学的営為は歇むことがなかった次第を示す。

第一部で歴史的情況を，第二部では思想家たちの生と思想とを調査した著者は，最終第三部にいたって，前出の神学者ラージーの読解を基軸として，哲学（ヒクマ）はいかなる教説，種別，手法を指すのかを探究し，それをつうじて 6/12 世紀の哲学の実態に迫る。第一章ではラージーの哲学的著作で展開された既存の哲学の「革新」が論ぜられる。ラージーはイブン・シーナーのファルサファを批判的に継受しかれ自身のヒクマをつくりあげた。その革新は認識論的と存在論的との二論点から説明される。前者についていえば，知識を関係とする関係主義的知識観が挙げられる。著者はイブン・シーナーとは異別的なこの特徴的な知識観の淵源をユダヤ教徒として生まれた哲学者・医家アブルバラカート・バグダーディーの認識論に求める。アブルバラカートの認識論はしかもまたガザーリーに

よる哲学批判によって提起された神の個物知をめぐる問題と，それが惹起した逍遙学派認識論の急所の露呈とに発源する。存在論的な革新としては，神の本質と存在とが非同一とみるラージーの立場が挙げられる。この非逍遙学派的存在論は神の知識における一性の問題にも連絡することになる。

第二章では哲学と宗教，より正確にはヒクマとカラームとの関係性が問題とされる。ラージーあるいはマスウーディーなどがそうであるようにポスト古典期の思想家はしばしばヒクマの書とカラームの書とを別個に著わし，それぞれの書中の学説には相異がみられる。たとえばラージーであれば，ヒクマの書である *al-Mabāḥiṯ al-mašriqiyyah* ならびに *al-Mulaḫḫaṣ fi'l-ḥikmah wa-l-manṭiq* では世界の永遠性が，カラームの書である *Nihāyat al-ʿuqūl fī dirāyat al-uṣūl* では神によるその被造性が説かれる。このばあいどちらの見解がより当の思想家の本意に近いかを定めることはできず，ヒクマとカラームそれぞれの面から哲学的問いに迫っているのだと著者はいう。Thomas Bauer の Ambiguität の概念に拠りつつ著者が論白するところによれば，イブン・シーナーとガザーリーの立場とのあいだの諍論によりポスト古典期の思想家たちはこの相反撥する道ゆきのいずれが正しいかを決めかねる “crisis of ambiguity” に立たされ，それにたいしてかれらは両方の立場を説くという ambiguation をもって応え，それが同一の思想家におけるヒクマとカラーム両様の異系著作の出現として結果した。なお本書のエピローグでは，いずれの分野の著作とも決めがたいラージーの晩年著作をめぐる試論をつうじてヒクマとカラームとの関係性があらためて考察に付される。

第三章は（広義の）哲学における手法が検討される。それまでの哲学において支配的であった逍遙学派的な論証主義的哲学とは対蹠地に立つ，ポスト古典期の弁証論的哲学の登場を，著者は，ガザーリーによる批判をその基点としてあとづける。『タハーフト』においてガザーリーは哲学者たちの学説がかれらの自己規定とは裏腹に論証主義において不徹底でありその実ムタカッリムのタクリードと相似形を呈することを指摘したが，その批判に応答したうえで哲学に革新をもたらしたのは前記アブルバラカートであった。かれらは逍遙学派に背馳して弁証論的に哲学体系を構築することを試みた（かつて著者はアブルバラカートの哲学に代表される，ポスト古典期で生じたかかる思潮を「弁証論的転回（dialectical turn）」と称したが（Griffel 2011），本書では，在来の哲学においては（論証との関係において）貶下する響きをもつ弁証論の語をアブルバラカートが避けたと考えられることに鑑みて，かれ自身の用語法に即く iʿtibār の語が重要視される）。

以上が本書のおおまかな構成である。既述のとおり本書では，イスラーム哲学がある時期から退潮した，あるいは滅亡さえした，という哲学史観が批判されるが，ここにおいて問われるのは「哲学（philosophy）」の身分である。本書では「ファルサファ」「ヒクマ」というともに哲学を意味しうる語が問題とされるが，

結局のところ，何を「哲学」と規定するかによってこの問いかけは有意義にも無意義にもなる。たとえばこんにちのイスラーム哲学史研究の泰斗ディミトリ・グタスなどはポスト古典期には哲学などなく――グタスにとって哲学とは，正しいとされる結末が前もって定められることのない，「絶えざる合理的探究」でなければならない――あったのは准（パラ）哲学にすぎぬと揚言するが，哲学の規定如何ではこの断言も故なしとはしない（Gutas 2018, 43）。いずれにしても，イスラーム由来の諸学諸知は宗教ではあっても哲学ではない，哲学とは基本的には（信仰に基づく不動の前提を置くことなく）「合理的」に真理を追求するファルサファに限られるとの題目の下では，本書の著者が力説するように，西欧の「合理的」な哲学への寄与やそれとの関わりの深浅を尺度とする哲学観が伸暢するだろう。ところで，翻って著者自身がこの尺度からまったく自由であるかといえば，あながちにそうともいえまい。というのも，皮肉な逆理ではあるが，「哲学」という名辞への著者の拘泥，別言すればある思考形態を「哲学」の名の下に回収することへの意志，学問的にとり扱うにたる高度な思考であれば哲学と呼ばれるべきであるとの固執は，哲学と宗教等の非哲学とを峻別し前者を限定的に囲いこもうとする領土劃定行為とその実裏腹であるように思われるからだ。いったい，ある知的営為が「哲学」ないし「哲学的」と認定されなかったとして，その営為の知的価値は少しでも増減するものであろうか。ある思考が他ではなく哲学であると挙揚することの裏側にはあるいは哲学ならざる思考（たとえば宗教）の貶価があるように料簡されないこともない（なお先にふれたように著者はカラームの学についても「哲学的」と形容する）。

くわえて，本書を読む営みはまたその外部を自覚する営みであるともいいうる。本書において著者はこれまでの泰西の研究者に反省を迫っているのだが，その一方で――従来的な西欧語の研究がそうであるのと同じように――アラビア語やペルシア語，トルコ語といった，非西欧語でなされた先行研究は殆んどこれを閑却している（とうぜん日本語による研究の蓄積も顧みられない）。西欧語圏でなされた研究が抱えていた痼疾はかならずしもこれまでのイスラーム哲学研究・解釈総体が有していたものとはかぎらないのだが，そうした外部については著者の意識の外に置かれており，宛然研究史の一部とは看做されていないかの如くである。たとえば，さしあたり井筒俊彦の仕事いらい，こんにちにいたるまでイスラーム思想やアラビア・ペルシア語文化圏の思想研究にかんする日本語による成果の積層は，数自体は多いとはいえないものの一つ一つの研究の充実性によって重厚であるが，それらはかならずしも本書が指弾して倦まぬような西欧における研究の痼疾を患ってはいない（ちなみにいえば日本語によるイスラーム哲学・思想の研究では西欧語の研究のみならず非西欧語の研究も参照されることが少なくない）――むろんかれら（われら）の研究にはそれに固有の問題が別にありうる

であろうことを否定するものではない。かくいえばとて評者はかかる点を本書の瑕瑾のうちに算える意図をもつものではない（西欧語の研究において主として西欧語の研究しか参照されないということにはなにも異例なところはない）。言いたいのは，本書が，非西欧語による研究者に，さらにはイスラーム圏でも西欧でもない陵域に立つ者にあらためて自身の研究の立ち位置や文脈をめぐる自照を促す効能をもつというそのことにほかならない。

ことほどさように著者の主張にはさらに発展的に論じてゆくべき如上の提題が含まれるわけだが，それにしても本書が一次文献を正確に読み同時に尨大な二次文献を博捜する堅実な労作であることに疑いは毫もなく，それゆえに本書が現時点ではいまだ研究の不足するこの分野においてまずもって参照されるべき基本書たりうることは必定であろう。

参考文献

Griffel, Frank. 2011: “Between al-Ghazālī and Abū l-Barakāt al-Baghdādī: The Dialectical Turn in the Philosophy of Iraq and Iran during the 6th/12th Century.” In Peter Adamson (ed.) *In the Age of Averroes*. London: Warburg Institute, 45–75.

Gutas, Dimitri. 2018: “Avicenna and After: The Development of Paraphilosophy. A History of Science Approach.” In A. Al Ghouz (ed.) *Islamic Philosophy from the 12th to the 14th Century*. Bonn: Bonn University Press, 19–71.

Sabra, Abdelhamid I. 1987: “The appropriation and subsequent naturalization of Greek science in medieval Islam: A preliminary statement,” *History of Science* 25, 223–243.

謝辞

本稿は JSPS 科研費 JP23KJ2008 の助成を受けたものである。